

「51対49」という思想

「暑い夏」である。

ロンドン五輪では、深夜にもかかわらず熱烈応援をしてみた。なでしこジャパンの掌々たる試合ぶりには「フェアプレーは金(メダルに値する)。(12日付)」とその健闘をたたえたが、心が揺さぶられる2週間だった。必ずしも世界レベルのプレーだからだけではない。自国が相手国を負かすこと自体に喜びれるのだ。たとえそれが自国選手のラッキーなプレーと、相手国選手の気の毒なミスによるものであってもだ。ナショナルリズムというもの、かくまでもゲーム観戦を盛り上げるのか。古代ギリシャの知恵にない近代的国家間の戦争をスポーツ競技に切り替えたクルーベルタン男爵の洞察に改めて脱帽した。

だが、熱波は五輪で終わらなかった。まずは韓国から、そして中国から攻めのほってきた。封印してきた領土をめぐる対立が一気に顕在化、なお火種を探し延焼の機をうかがっている。韓国大統領の竹島上陸には「深いトゲをどう抜く」(12日付)と、長期的な相互利益に立つ問題解決を促し、香港人の尖閣上陸に対しては「挑発の背後を見極めよ」(17日付)と、慎重で柔軟な対応を求めた。

注意すべきは、ナショナルリズムのわなである。国家を健全に支える抑制的なナショナルリズムもあれば、暴走と自己増殖を繰り返す結果的に国家の選択の幅を狭めるものもある。開戦時、敗戦時いずれも外相だった東郷茂徳氏の外交の要諦は「51対49」。つまり相手に51を譲り、自分は49で満足する気持ちを持つことだった。孫の東郷和彦氏が明らかにしている。ほぼ同等ではあるものの、相手に一つ多く与える交渉術。これこそが最もいい結果を生む、という。逆に言えば自らが一つ減を背負うこと。政府も国民も共に覚悟を要することである。(論説委員長・倉重篤郎)

― 次回は9月9日に掲載



海上保安庁の巡視船を下り連行される香港の活動家―那覇市で16日、武市公孝撮影